

タイトル：葉ネギのネギアザミウマに対する各種粒剤の防除効果

[要約]

定植時にエチルチオメトン、ジメトエート、カルボスルファン3%、イミダクロプリド、ニテンピラム、チアメトキサム、クロチアニジン、ジノテフランのいずれかの粒剤を土壌処理すると、葉ネギのネギアザミウマを収穫期近くまで防除できる。また、中耕時の土壌処理で有効な粒剤もある。

香川県農業試験場・病害虫担当

[連絡先] 087-889-1121

[部会名] 生産環境（病害虫）

[専門] 作物虫害

[対象] 葉茎菜類

[分類] 指導

[背景・ねらい]

葉ネギは露地において春から晩秋まで栽培できる軽量野菜で、高齢者が栽培しやすいこともあり、栽培面積が増加している。しかし、ネギアザミウマが恒常的かつ広域に発生して葉をカスリ状に加害するため、品質低下が問題となっている。そこで、ネギアザミウマに対する薬剤散布を削減して省力化を図るとともに、作期に応じた防除体系を組む資料とするため、本種に対する粒剤の防除効果を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 定植時に処理することにより、ネギアザミウマの発生を長期間に渡って抑制できる粒剤は、エチルチオメトン、ジメトエート、カルボスルファン3%、イミダクロプリド、ニテンピラム、チアメトキサム、クロチアニジン、ジノテフランである。
これらの中には、収穫期（定植40～50日後）まで有効なものもある。一方、ダイアジノンとイソキサチオンは防除効果が低い。
2. 定植20日後の中耕時に処理した場合は、定植時の処理よりも防除効果が劣るが、7種粒剤の中ではベンフラカルブ、カルボスルファン3%、ニテンピラムが有効である。チアメトキサム、クロチアニジン、ジノテフランは定植時処理の防除効果は高かったが、中耕時処理での防除効果は低い。

表1 葉ネギのネギアザミウマに対する各種粒剤の防除効果

[成果の活用面・留意点]

1. 補正密度が低い粒剤は、葉のカスリ状の被害も少ない。
2. 粒剤の処理によって、葉先での褐変が助長される場合がある。中でも、エチルチオメトンは軽微な褐変が長期間に渡って認められ、ジメトエートは一時期ではあるが甚だしい褐変が生じる。
3. 表1において**を付した粒剤の処理は、ネギに対して未登録である。また、*を付した粒剤の処理はネギに対して登録があるが、ネギアザミウマには未登録である。

表1 葉ネギのネギアザミウマに対する各種粒剤の防除効果¹⁾

薬剤名	処理量 (kg/10a)	処理法 (2)	定植後経過日数					葉の観察 (3)	登録 (4)		
			0	10	20	30	40				
ダイアジノン5%粒剤	4	a	◆	94	97		87	82	121	-	*
	6	a	◆	90	97		99	128	123	-	*
	4	b	◆	67	57		97	125	185	-	*
	6	b	◆	62	40		80	78	133	-	*
エチルチオメトン5%粒剤	3	c	◆	3	3		12	19	51	++	*
ベンフラカルブ5%粒剤	3	b	◆	2	9		59	59	164	+	
	6	b	◆	0	4		50	45	97	+	
	3	A			◆		19	23	52	-	
	6	A			◆		8	16	42	-	
ダイアジノン4%・エチルチオメトン2%粒剤	6	b	◆	9	4		29	19	79	++	
ダイアジノン5%・ベンフラカルブ3%粒剤	6	b	◆	0	4		44	46	146	+	
エチルチオメトン3%・ベンフラカルブ3%粒剤	3	b	◆	3	8		30	38	91	++	
イソキサチオン3%微粒剤	6	a	◆	65	49		59	94	145	-	*
ジメトエート5%粒剤	3	d	◆	0	2		4	8	71	+	
	6	d	◆	2	1		5	8	56	+	
アセフェート5%粒剤	3	b	◆	0	2		36	59	162	-	**
	6	b	◆	2	2		26	43	168	-	**
カルボスルファン5%粒剤	3	b	◆	5	11		62	56	116	-	
	6	b	◆	2	10		54	79	140	-	
カルボスルファン3%粒剤	3	b	◆	9	6		22	26	47	-	
	6	b	◆	0	5		7	3	20	+	
	3	A			◆		20	32	79	-	
	6	A			◆		9	24	40	-	
イミダクロプリド1%粒剤	3	b	◆	0	4		6	4	28	-	**
	6	b	◆	3	2		4	6	22	-	**
ニテンピラム1%粒剤	3	b	◆	3	1		7	8	32	-	**
	6	b	◆	0	0		3	3	17	-	*
	6	A			◆		27	28	60	-	**
アセタミプリド2%粒剤	3	b	◆	36	29		69	69	74	-	**
	6	b	◆	14	7		26	38	90	+	**
	6	A			◆		83	95	100	-	**
チアメトキサム0.5%粒剤	6	b	◆	2	1		6	3	18	-	**
	9	b	◆	0	2		8	3	12	-	**
	6	A			◆		84	87	77	-	**
クロチアニジン0.5%粒剤	6	b	◆	3	4		9	10	21	-	**
	3	A			◆		131	106	133	-	**
	6	A			◆		86	109	108	-	**
ジノテフラン1%粒剤	6	b	◆	0	9		26	24	41	-	**
	6	A			◆		60	75	118	-	**

1) 処理日を◆で示し、寄生成虫数と幼虫数の合計値から算出した補正密度(無処理を100とする)を経時的に示す。

2) a: 定植時全面土壌混和処理, b: 定植時植溝土壌混和処理, c: 定植時植穴土壌混和処理, d: 定植時植溝処理, A: 中耕時条間土壌混和処理を示す。

3) -: 常時無処理と同程度, +: 定植14日後では無処理より多いが30日後には同程度, ++: 定植30日後でも無処理より多い。

4) **: ネギおよびネギアザミウマに対して未登録, *: ネギには登録があるがネギアザミウマに対して未登録。

[その他]

研究課題名: 園芸作物における病害虫の総合防除技術の確立

予算区分: 県単

研究期間: 平成12年度(平成10~15年)

研究担当者: 松本英治, 藤本 伸, 十河和博

発表論文等: なし